

02・玄関で声我慢させられながら、『あまあま調教おしおきセックス』

とある年の春。四月二十日、水曜日。十六時四十分ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。室温は二十二度。

地元民は、暖房を入れたり切ったりして、使い分けながら暮らす室温だ。

場所は、七緒の自宅。

『バアドモール 鵜中央店』から歩いて十分ほどの場所にある集合住宅だ。
主人公は今、この家に入るなり……七緒に襲われている。

SE1 七緒が玄関で靴を脱ぐ音

【最初から最後まで流す】

SE2 七緒が主人公を、玄関の壁に追い詰める音

【最初から最後まで流す】

七緒、玄関に入って靴を脱ぐなり、すぐ脇の壁に主人公を追い詰め、キスをする。

●正面 0センチ

「息づかいのみで表現する。

キスの予備動作。

主人公を壁際に追い詰め、主人公の頭の両脇に手をつく『壁ドン』状態から、主人公の肩に手を添え、顔を近づけて、キスを始める」

ん……♡

【※3回※ キスする。

一回ごとに少し間が空く。

ゆっくり、音を立ててする軽いキス。

あえて優しく、余裕のあるキスから始める事で、自分の優位性をアピールすると共に、主人公をリラックスさせる」

ちゅ♡ ちゅ。

ちゅ♡

【※6回※ キスする。

主人公の口を開けさせ、舌を入れてディープキスする。

ゆっくり、でもねちねちと、容赦なく口の中をいじめていくキス」

んっふ……ん♡ ちゅ……ちゅぽっ♡
ちゅっ。ちゅ♡

【※キスをやめる※】

わかりやすく音を立てて、唇を離す】

ちゅぽっ……♡

【息づかいのみで表現する。

満足気に息をつく。

にやにやと、一度口許をぬぐって、主人公を見つめている】

はあ……♡

【にやにやと幸せそうに。

主人公の首に両腕を絡ませ、正面から主人公を見つめて。

たったこれだけのキスでとろとろになっている主人公が、とても可愛らしいので。

また、自分も同じように、少しのキスでとても幸せな気分になったので】

キスって、一回したら一杯したくなりますよね♡

【満足げに。

くすくす、にやにやと嬉しそうに】

何（なん）でだろ♡

【※3回※ キスする。

一回ごとに少し間が空く、ゆっくり、音を立ててする軽いキス。

まだ攻め込まない。まずは主人公をキスでほぐして、とろとろにさせる」
ちゅっ。ちゅっ。ちゅ ♡

〈主人公〉

「はあ。はあっ。はあっ……♡」

主人公、七緒のキスを受け止めると、その唇と舌に応えて、またキスをする。
まだ、来たばかり。

前戯の、しかもそのほんの入り口にいただけだ。

であるにもかかわらず、主人公の目はすでに潤み、呼吸も上がってきている。
これから起きる事を想像して、興奮しているからだ。

そんな主人公を見て、七緒がにやにやと微笑む。

セックスする時……七緒はよくこういう、少し意地悪で、でも、すごく幸せそうな表情
をする。

七緒、主人公の左耳側に顔だけを移動させて、ささやく。

●左 0センチ

「あまあまにゆっくりと。」

主人公と今日もセックスできる甘い喜びに満たされつつ『今日はどのように、主人公を性的に満足させようか』と考えている。

特に、耳からの情報には力を入れたい。

七緒は、主人公のお気に入り音声作品である『むーちゃんの声優さんによる、癒し系A S M R』に強い対抗意識を抱いている。

主人公が発売当時、ずいぶんへらへらと、嬉しそうに聞いていたからだ。もちろん、フィクションと現実なのだから、勝負するようなものではないとわかってい

る。
だが、今の七緒には『何もせずに、ただ何となく悔しい気持ちでいる』選択肢はない。なので、恋人として『主人公の耳を喜ばせる』という観点において、ベストを尽くす気でいる」

先輩。大好きですよ。だーい好き。

今日も沢山♥ 恥ずかしい事しましょうね♥

【息づかいのみで表現する。

キスの予備動作。

『これからまたキスしますよ』という事を、わかりやすく、かつ、ねっとり伝える」

あんむ……。

【※1回※ キスする。長めの、主人公の口の中に舌を入れるキス】

んっふ……♡ ちゅふふふ……♡

【※4回※ キスする。

そのまま、音を立てて、夢中でディープキスする】

んっ♡ んっふ♡ ちゅっく♡ くちゅるっ……♡

【※しばらく※ キスする。

舌を絡めて、甘々に、少し派手に音を立てていく。

『今自分達はキスをしていて、それは、これからセックスに発展するキスですよ』と、主人公に唇から、耳から理解させていくキス】

ちゅっく♡ ちゅ♡ ちゅばっ……くちゅっ……ぶちゅっ♡

【※1回※ キスする。軽い、分かりやすく音を立てて、一度キスを止める合図のキス】

ちゅ♡

【※3回※ 荒く、早く呼吸する。

七緒もすでに、大分興奮して来ている】

はあ、はあ、ふう……。

【※1回※ キスする。

甘く優しいキス。また、自分の興奮を誤魔化すキス】

ちゅ♡
」

主人公、家につくなり七緒にめちやくちやにキスされ、目の前の快感に身も心も溶かされていく。

——ああ……やば。

気持ちいい。

キスするの、すっごい気持ちいい……。

半年前までは『わたしって、一生キスすらしないで終わるのかも』なんて思ってたのに。今じゃもう、毎日なーにキスしてもらわないと生きていけないよ。

……どうしよう。もっとしたいし、ずっとしたい。

もっとキスしまくって、口の中にあるのが、自分の舌なのか、なーのなかかわかんなくなる位絡めまくって。

お互いの唾液流し込みまくって、喉をぐちゅぐちゅにし合うまで、ひとつになりたい。

主人公、すでにぼんやりし始めた頭でそんな事を考えながら、繰り返される甘いキスに、うっとり満たされる。

七緒の事が大好きだ。

この人のする事を、全部喜んで受け入れたい。心からそう思う。

だが、その一方で心臓はバクバクと跳ね、身体その他の部分も、激しく脈打っている。要するに今、主人公はホッしているのに、息もできないほどドキドキしている。

七緒との行為はいつもそうだ。だから、いつまでたっても慣れない。

七緒、正面にいるままささやく。

★正面 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「くすくすと嬉しそうに、ひそひそと、あまあまにささやく。

今度は、主人公に『キスをしていない状態で、舌を出せ』と促している」
ペロ出して？」※

〈主人公〉

「ん…………」

主人公、素直に従い、舌を見せる。

七緒はよくこれをさせたがるのだが、主人公はいつもとても恥ずかしい。

だが、それ以上に気持ちよくて嬉しいから、抗えず。いつもおとなしく舌を差し出すのみとなる。

七緒もそれをわかっていて、わざとこうさせるのだろう。

そう思うとますます恥ずかしくなるが……それすら構わない位気持ちいいから、仕方ない。

● 正面 0センチ

「【鼻で優しく、でも満足げに笑う。

主人公が従順に舌を差し出し、その光景が、とてもいやらしいので】

ふふふ。この顔エロ♥

【息づかいのみで表現する。

キスの予備動作。

『これからまたキスしますよ』という事を、わかりやすく、かつ、ねっとり伝える』
はんむ……

【※4回※ 自分も舌を出して、舌と舌をくっつけるキス。

下から主人公の舌に自分の舌をくっつけ、舐めあげる。

それから、今度は自分の舌を上にして、逆の動作をして攻める。

これを、主人公の顔を見つめて反応を楽しみながら、合計四回繰り返す】

れるっ……♡ あむっ……♡ ぴちやっ♡ れろろっ♡

【※1回※ キスする。そのまま唇を重ねる。

この次から、舌を吸うデープキスに移行する】

ちゅ♡

【※しばらく※ キスする。

主人公の舌を吸って、たっぷりいじめるデープキス。

キスしながらどんどん興奮してきて、少しずつ濃く、ねっとりしたキスになる。

主人公の顎から頬に両手を添えながら、胸を突き出して、胸が当たるようにしながらキスしている】

んっふ……ん♡ あむ……ん♡ ん♡ ん♡ んっふ……♡

くちゅちゅ……ちゅぽっ。

【※1回※ キスする。ねっとりした音を立てて、一度キスを止める合図のキス】

くぽぽっ♡

【※6回※ 荒く、早く呼吸する。だんだん、少しだけゆっくりになる。

七緒もすでに、大分興奮して来ている。

この間も胸を押し付けて、主人公に自分の胸を意識させようとしている】

はー。はー♡ はー♡

はー。はー♡ はー……♡ 「

〈主人公〉

「はあ……♡ はあ……♡ はあっ……♡」

七緒、主人公に胸の感触を意識させながら、一度少し離れる。
それから、また嬉しそうに口を開く。

● 正面 3センチ

「〔鼻で優しく、でも満足げに笑いながら、うっとり。〕

主人公がすでにとろとろになっているのが、とても可愛らしいので」

可愛い♡

「〔鼻で優しく、でも満足げに笑いながら。嬉しそうに。〕

主人公を興奮させるために、からかう。

主人公がとても気持ちよさそうな顔になっている事を指摘したり、ここに来るまでの主人公についていやらしい推測をしたりして、いじめる」

先輩。キスだけなのに、もうお顔とろとろじゃないですか♡

フードコートから家（うち）着くまで。

ずっとえっちな妄想してたんでしょ♡」

〈主人公〉

「なっ……♡」

主人公、七緒の言葉に素直に煽られて、びくっとたじろぐ。

七緒の些細な言動に振り回されるなんて、まるで昔の主人公のようだし。しかし、あの頃と今では、関係の濃さがまるで違う。

当時の七緒は独特の気の遣い方をしていて、主人公を甘くからかいながらも、どこか距離を感じさせるところがあった。

でも、今は違う。

びったり密着して、全身を使って。

ためらいもなく、めちやくちやに主人公を誘惑してくる。

● 正面 3センチ

「【鼻で優しく、でも満足げに笑いながら。

主人公があからさまにもじもじして、恥ずかしそうに目を泳がせるのがとても可愛らしいので】

隠さなくていいですよ?。」

SE3 七緒が主人公の腰に触れる音

【最初から最後まで流す】

七緒、主人公の左耳側に顔だけを移動させて、ささやく。
声の方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと、あまあまにささやく。】

『すでに性器は濡れているんだろう』と言いたい」

スカートの中とか、もうヤバイでしょ♥※

〈主人公〉

「……っ！」

主人公、七緒に腰を触られながらも、どうにか悟られまいと身をよじる。
言うまでもなくその通りだ。

主人公はここに来るまで、ずっと七緒に犯される妄想をしていた。

七緒の指先に、唇に。容赦なく好きにされてあっけなく。

でも、ずっと余韻が残るほどねっちりと深くイカされる未来を想像して……はち切れそうなほど興奮していた。

そのせいで身体がどうなったかなんて、わかりきっている。それでも主人公は、必死に証拠をつかまれまいとしている。それが、ますます七緒を喜ばせるのだ。

● 左 0センチ

「【※1回※】キスする。左耳のふちに、優しくキスする」
ちゅ♡」

七緒、少し離れて、正面からキスする。声の方向が『左』から『正面』になる。

● 正面 0センチ

「【※しばらく※】キスする。

舌をねっとり絡ませて、がっつり攻めるディープキス。
うるさすぎない程度に音を立てながら、音でも主人公を興奮させようとする」

んっふ……ちゅ♡　ちゅるる……ちゅっ♡　ちゅくく……ちゅ♡
じゅっ♡　じゅっ♡　じゅるるっ♡　ちゅぱっ♡

【※3回※　荒く、早く呼吸する。

満足げに主人公を見下ろし、征服感に満たされている】
はー、はー、はー……♡

〈主人公〉

「……………♡」

七緒、勝ち誇ったように余裕の笑みを見せると、一度少しだけ離れる。
それから、また嬉しそうに主人公の顔を覗き込む。

●正面　3センチ

「【優しく続きを促す。主人公が何か言いたげにしているので】
んー？

何（なん）ですか？」

〈主人公〉

「……………」

主人公、七緒に優しく見つめられ、恥ずかしくなって目をそらす。

ぐちゃぐちゃに濡れたショーツが股間に張り付いて、さっきから落ち着かないのだ。それだけじゃない。

ずっと押しつけられている七緒の胸の感触が、あまりにも心地よくて……。うっとりして、ずっと密着してたくて。

でも、手で、もっと触れたくて、おかしくなりそうなのだ。

そんな主人公を見て、七緒は喜びを抑えきれないようだ。

わかりきった事をわざわざ言葉にして、主人公の情欲をさらに煽ってくる。

●正面 3センチ

「優しくからかう。

主人公があからさまに目を泳がせ、七緒の胸に触れたそうにしているので。実際の主人公は、今、七緒の胸を見ていない。

しかし『とてつもなく意識している』のは間違いない。なのでそれを『見ている』とみなして話す。

主人公が自分の誘いに乗ってくれている事が嬉しい」

なあに？ おっぱいばっか見て。おっぱい触りながらキスしたいの？」

〈主人公〉

「……ちが……っ ♡」

主人公、『それは違う』と主張しようとするが、無駄だ。

七緒は主人公の、必死に配慮しながらも、結局性欲を抑えきれずにいるさまを見るのが大好きなのだ。

SE 4 七緒が主人公に、自分の胸をブラウス越しに触らせる音

【最初から最後まで流す】

●正面 3センチ

「くすくす笑いながら、嬉しそうに。

『違う』と否定する主人公の言葉を無視して。

主人公の手を自分の胸に導き、あっさり、当たり前のように触らせる。

主人公が、自分の誘惑に乗ってくれる事が嬉しくてたまらないので。

七緒は『自分は主人公に『性的魅力がある』とみなされている』と実感する事が、とて

も嬉しいので」

はい♥ どうぞ♥」

〈主人公〉

「……………あ……………♥」

主人公の手のひらに、温かくて柔らかい感触が満ちる。
あまりにも魅力的で、くらくらする。

七緒、近づいて、左耳にささやく。

声の方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、嬉しそうに。

主人公に、自分の胸を制服のブラウス越しに触らせながら。

『柔らかくて』が『やーらかくて』になる」

やーらかくて気持ちいいね♥」※

七緒、そのまま左耳にキスする。

●左 0センチ

「【※1回※】キスする。左耳のふちに、優しくキスする」
ちゅ♡

〈主人公〉

「……あっ……♡」

七緒、主人公の左耳を舐める。

☆右 舐める 0センチ

「【左耳のふちのすぐ内側の部分を、上から下に向かって、れろっど舐める】
れろっ♡

【今度は反対方向に舐める。

下から上に向かって、れろっど、ひとつ前と合わせて二往復して舐める】
くちゅっ♡ れろろっ……♡ れーろっ♡

【左耳のふちのすぐ内側の部分を、最後にもう一度舐める。

そして、耳舐めをやめる」
んっふ……」

七緒、主人公の左耳元で話す。

● 左 0センチ

「『まるで『今気づきました』という感じで。

本編トラック01にて、フードコートで胸と太ももを密着させながら誘惑した件について話す。

七緒はあの時、自分の身体の性的な部分を意識させる事で、露骨に主人公を誘惑した。

『主人公は、衆人環境でささやかないたずらをされるのが好きである』と理解した上で、確実に欲情してほしかったからだ。

なのに、まるで今初めてこの件に気づいたような言い方をする。

その上、興奮したのは、あたかも主人公の責任かのように言う」

あ♡ わかった。

さっきフードコートで、むにゅ♡

って押し付けられた時から、触りたくてしょうがなかったんでしょ」

〈主人公〉

「……………」

七緒、左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと、嬉しそうに』

えっち」※

主人公、ダメ押しのように囁かれ、いよいよ理性がはじけ飛びそうになる。
もう、他の事は考えられない。

七緒の胸の事で頭が一杯で『はい、そうです。わたしは今、なーにおっぱいを押し付けられて。勝手に欲情して、セックスしたくて仕方なくなっています』と正直に打ち明けて、負けてしまいたくなる。

〈主人公〉

「……………あっ……………あっ……………」

あっ……………♡ その、なーっ……………♡

そして七緒は、それらをすべて承知の上で、ますますいじめてくる。

七緒、主人公の左耳元で話す。

● 左 0センチ

「『にやにやと、ちよつとわざとらしく。』

主人公が返答に窮しているのをいい事に、さらにからかう。

フードコートから桐生家に着くまでの道のりについて、口から出まかせを言う。

実際の主人公はむしろ、必死に目をそらしてもじもじしていた。

七緒の胸を意識するあまり、どうにか見ないようにと努力しているが……時々ちらりと見てしまつては、小さくなつて申し訳なさそうにしていた。

七緒はそれを『可愛い』『好ましい』と思った。

主人公は交際前も今も、七緒に不快な思いをさせる事を、とても恐れている。

それゆえに、これだけ深い関係になつても尚、性的な話題や視線については非常に気を遣っているのだ。

新アカウントの件をなかなか話せなかったのも、おそらくそのような『配慮しすぎる傾向』が要因の一つだろうと、七緒は捉えている。

そして七緒は主人公のそんなところがいとおいしいし、大好きである」
歩いてる時も、何（なん）つか見られてる気いしたんですよねえ」

七緒、左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「わざとらしく媚びた声で」

もしかして私。ずーっと視姦されちゃってたんですか？」※

〈主人公〉

「あっ……あっ……♡

ちがっ……♡ そんな事しないっ♡ 見てないっ♡」

主人公、涙目になって否定するが、すでに負けは確定している。
実際がどうであろうと意味はない。

主人公はこれから間違いなく濡れ衣を着せられ、なすすべもなく犯され、おしおきされる。

それは決まっているからだ。

七緒、少し離れて、正面に回って主人公の顔を覗き込む。
声の方向が『左』から『正面』になる。

● 正面 3センチ

「【にやにやと嬉しそうに。

さっきまで恥ずかしくて無言になっていたくせに、この疑惑を持たれた途端、必死で、涙目になって否定している主人公が可愛いので。

また、主人公が否定せずとも、そんな事はもちろんわかっているのだから？
えー？ すごい否定するし。違うの？

「さらっと。しかし、実際は残念に思っている。

七緒は主人公がそんな事をする人間ではないとわかっていて、それでも少し残念に思う。
主人公になら、どんな事をされてもいいと思っっているのだから」
残念」

七緒、近づいて、左耳元で話す。

声の方向が『正面』から『左』になる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと優しく、嬉しそうに。内緒話をするように。優しく主人公の性欲を肯定する。

からかったり媚びた印象にしたりせず、優しく伝える」
いいんですよ？ 見ても。
もつと触っても。

私は先輩の彼女なんですから。

先輩だけは私の事。いくらでもいやらしい目で見て。

いくらでもひどい事していいんです♥

【一呼吸おいてから。

ひそひそと、とても嬉しそうに。

主人公に性欲を抱かれる事が、本当に嬉しいので。

七緒は交際前、主人公の事を異性愛者だと捉えていた。

『たとえ主人公の推しキャラクターが女性であろうと、リアルの女性である自分に、恋愛感情や性欲を抱く事はないだろう』と思い込み、一人悲しくなっていた。

なので、実際はそうではなかった事がわかった今も、主人公に欲情される事が信じられないほど嬉しく、幸せなので」

それにね♥ 嬉しいですよ。

先輩が私でエロい事考えてくれるの。

【ひととき優しく。

ダメ押しして、主人公の理性を奪いたい】

だから。一杯私で欲情して下さいね♥※

七緒、そのまま左耳にキスする。

● 左 0センチ

【※1回※ キスする。左耳のふちに、優しくキスする】
ちゅ♥

〈主人公〉

「あっ……あっ……♥ あ……♥」

七緒、少し離れて、正面に回って主人公にキスする。
声の方向が『左』から『正面』になる。

● 正面 0センチ

「【※1回※】キスする。額に優しくキスする」
ちゅ♡

「【※1回※】キスする。唇に軽くキスする」
ちゅ♡

七緒、少し離れて、主人公が胸を触りやすいように位置どる。
また、主人公の顔がよく見える位置で見つめる。

● 正面 15センチ

「くすくすと嬉しそうに。」

主人公がとろんとした目で手のひらを広げ、自分の胸の感触を楽しみ始めたので。
全く反論の意味も見せずに、完全に欲望に負けてしまっているのだ」

ほら♡ 沢山もみもみしようね♡

先輩が一日中『触りたい、触りたい』って思ってる七緒のおっぱいだよ♡

〈主人公〉

「……♡ はーっ……♡ はーっ……♡ はーっ……♡」

主人公、七緒に顔を覗きこまれながら、夢中でその胸を触る。
もう、ダメだった。

この数十分ほどの間、さんざん七緒に誘惑され、抗う理性などみじんも残っていない。
だから、まるで初めて触れるみたいに七緒の胸の柔らかさや弾力に驚き、感嘆して、声
も出せないほどの喜びに包まれて揉みしだく。

ブラウスの手触りは吸い付きそうに心地よく、その全身からは、とてもいい匂いがする。
しっかりと手のひらで揉みほぐせば下着の存在を実感するし、さらにその下にあるもの
を意識すれば、いよいよ頭がおかしくなりそうだ。

七緒に触りたい。

触れ尽くす事で、そのすべてが自分のものなのだと実感して、単純すぎる位の幸福に浸
りたい。

そんな思いで、思考が占められていく。

● 正面 15センチ

「【※6回※】 少し荒く、早く呼吸する。だんだん少し早くなる。
かなり興奮してくる。

主人公が夢中で自分の胸を触っているの
「はー、はー。はー。」

はー、はーっ。はー……♡

【優しく。

『もっと乱暴に揉んでいいよ』と促す。

主人公が胸を触り始めたものの、どこかまだ遠慮がちなので

いいよ……♡ブラウスしわしわにしちやって。

すぐ洗うし。好きなだけ揉んで♡

【※6回※ ゆっくりめに呼吸する。次第に、少し早く、荒くなっていく。

胸を触られて、とても気持ちいい。快感に耐えている】

はー、はー。はー。

はー、はー、はー……っ♡

【高く小さく喘ぐ。

主人公の手つきがいやらしくなってきたので】

……あ。

【※6回※ 少し早く、荒く呼吸する。

胸を触られて、とても気持ちいい】

はあ、はあ、はあ。

ふう、ふう、ふう……♡

【低く小さく喘ぐ。

主人公がブラウス越しに乳首の位置を見つけて、揉みながら人差し指で優しくひっかいて刺激してくるようになったので」

あ……っ♡

【低く、びくっと喘ぐ。

不意を突かれたように。

主人公に『乳首当て』され、ブラウス越しに乳首を刺激されるようになって、とても気持ちいいので」

あっ……っ♡

【低く、耐えるように喘ぐ。荒い呼吸で。

主人公の愛撫があまりに的確なので。

また、主人公の『一線を越えた後も、処女だった頃のようにうぶに振る舞う』『そのくせ、真面目で細やかで手先が器用。その上知識欲の強い性格のおかげで、どんどんセックスの技術が上がっている』という、ギャップのある姿に興奮してしまうので。

しかし、気持ちよすぎて、興奮しすぎて『このままではまずいな』と思い始める」

……あ。あ。あ。

あ……っ♡

【※6回※ 呼吸する。荒く、早く呼吸する。
とても気持ちいいので。

何とか呼吸を整えようとしている」

はー、はー。はー。

はー……はーっ、はーっ……♡」

七緒、余裕がなくなってきた、小さく身をよじる。

気持ちいい所に当たっている主人公の指をさりげなくずらして、なんとか口を開く。

●正面 15センチ

「【なんとか平静を装って。

しかし、呼吸は荒く、ものすごく感じていたのがバレバレな様子で。

このまま胸に触られ続けていると『おしおき』の役目を放棄して責められなくなってしまう。なので、内心慌てて主導権を取り戻そうとしている」

あー。でも、これじゃお仕置きになんないですね……♡

【だが、自分も気持ちよくなりたい。

布越しなのに、すでに乳首にはじわつとした快感が広がり、もっと刺激してほしいなっている。

なので、攻めつつ、自分も気持ちいい方法を考える」

あ♡

……じゃあ、あれしめしよつか……♡」

〈主人公〉

「……？」

七緒、正面の、今の位置でささやく。

主人公、両手で胸を触ったまま潤んだ目でそれを見上げ、はあはあと甘く呼吸する。

★正面 ささやく 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「【必死に平静を装いながら、あまあまに、にやにやとささやく。

『お互い上半身だけ脱いで、乳首合わせをしよう』と提案している」

あ・れ♡

私のおっぱいで。先輩の乳首♡ いじめてあげます♡ ※

〈主人公〉

「……！」

主人公の瞳が期待に大きく揺れると、七緒が心底嬉しそうに微笑んだ。

自分だってすでに相当余裕がなくなってるくせに、あくまで自分主導であろうと、更に恥ずかしい提案をしてくる。

七緒、近づいて、左耳元で話す。

声の方向が『正面』から『左』になる。

● 左 0センチ

「くすぐすと嬉しそうに。

内心ほっとしている。主導権を無事に守り切れそうなので」
乳首合わせ大好きでしょ？

【※1回※ キスする。左耳に軽くキスする】

ちゅ♡」

主人公、もはやとくに観念して、素直に頷く。
そんな主人公の左耳に、七緒がささやく。

★ 左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと嬉しそうに。」

以後『なー』はすべて『七緒』のあだ名】

なーのお洋服。脱がして？」※

〈主人公〉

「……………」
♥

SE 5 主人公が、七緒のブラウスを脱がす音

【最初から最後まで流す】

主人公、荒い息でどきどきと、そのくせ慣れた手つきで、丁寧に七緒のブラウスのボタンを外していく。

そして、思う。

……あー。もうだめ。わたし、もうだめだ。
だってもう、すっごいいい匂いする。

この、なーのシャンプーの匂いと、後なんだろう？ よくわかんないけど、なーからするいい匂いを嗅いでるだけでほんとだめだ。

女の方は、相性のいい男の人を無意識に感じ取って、その匂いを『好きだ』って思うっ

て聞いた事あるけど。

あれって絶対、異性限定じゃない気がするよ。

だって、好きな人の匂いっていうのは最高に心地よくて、ずっと嗅いでたくて。

めちやくちや興奮するものじゃないか。

科学的とか、生物の本能的な話とは違う話になるかも知れないけど……。

とにかく他のものが全部どうでもよくなる位素敵に感じるって、わたしは思うんだ。

と。

● 正面 15センチ

「びくつと喘ぐ。」

主人公にただブラウスを脱がされるだけで、とても興奮してしまったので」

あ♡

【※4回※ 『荒く早く』から『意識してゆっくりと』呼吸する。

なんとか平静を装おうとする】

はあ。はあ。はー……。

ふう……っ。

【なんとか平静を装って。

にやにやと嬉しそうにからかう。

ブラウスのボタンを全部外され、下着を露出しながら」

すごい見てるゝ♥ 見過ぎゝ♥

まだブラなの？

制服するの、ほんと好きですもんね♥」

〈主人公〉

「……………」

● 正面 15センチ

「[なんとか平静を装って。

にやにやと嬉しそうにからかう。

主人公が『はい、その通りです』という顔をして恥ずかしそうにしているの」

脱げかけの制服好き？ 何（なん）か変態っぽいなあ。

【しれっと】

あ。変態でしたね」

七緒、主人公の右側に頭を移動させて、ささやく。

声の方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【にやにやと甘くささやく。

主人公の首に両腕を回し、身体を主人公側に少し傾けて『ブラジャーのホック外され待ち』のポーズを取りながら。

また『変態』という言葉を使った事で、交際前、前日譚トラック02での出来事を思い出す。

あの時七緒は、ケガの治療をする事で、初めて主人公の身体に触れた。
それまで、自分から主人公に触れる気はなかった。

なので、とても緊張したし、これが最初で最後の経験だろうと思った。

その位、七緒にとって主人公への片想いは絶望的で、まず叶わないと思う事だったのだ。
だけど、現実はそうではなかった。

それどころか、今では主人公の方から夢中で七緒を求めてくる。

七緒は今もそれが信じられないし、恋人として主人公と過ごす日々を、いつも夢のように感じている。

しかし、交際を始めて半年がたった今も、それをなかなか素直に伝えられない。

七緒は根本的に臆病なので――

ほら♥

こうやってしてますから、ホック外して♥」※

〈主人公〉

「はー……はーっ……はー……♥」

● 右 0センチ

「高く甘く、漏れ出るように喘ぐ。

ブラジャーのホックを外される時は、いつもすごく興奮するので」

んっ……♥

【興奮して息をつく】

……ふう。

【にやにやと嬉しそうに】

はあ……脱がされちゃった♥」

七緒、主人公の正面に戻り、主人公を見つめながら、服を脱ぐように促す。
声の方向が『右』から『正面』になる。

●正面 15センチ

「にやにやと嬉しそうに。

早く主人公の上半身裸が見たいので」

じゃあ、先輩も脱ぎ脱ぎしよ♥

自分で脱いで♥

えっち用の格好になる♥」

〈主人公〉

「ううう……♥」

主人公、裸を『えっち用の格好』と表現する七緒に煽られ、はあはあと涙目になりながらブラウスのボタンを自ら外し、ブラジャーを露出する。

そのまま脱いで上半身裸になり、発情して熱くなっている身体を見せると……額から、
つうつと汗がこぼれた。

〈主人公〉

「はあ、はあ、はあ……♥」

そんな一部始終を、七緒が嬉しそうに眺めている。

上気した頬とか、しっとり濡れた首筋とか、とつくに隆起した乳首とかを見て、楽しげにしている。

七緒は主人公が服を脱ぐところを見るのが、とにかく好きだからだ。

そう。七緒はセックスする雰囲気じゃない時でさえ『先輩。着替え見せて♥』と言っては着替える所をにやにやと見つめてくるし、それどころか邪魔してきたり、平気で脱がして触ってきたり……。果ては、そのまま一方的に気持ちいい事をしてくる時だってあるのだ。

つまり、いつも視姦してくるのは七緒の方なのだ。

暇さえあれば主人公に性的な視線を送って、触ったり舐めたりして、恥ずかしい事をしてくるのは、七緒の方なのだ。

だけど主人公は、それが嬉しい。

ずっと『モテない』『性的アピールに乏しい』と思っていた己の身体が、七緒にだけは魅力的に映り、とても価値のあるものになる。

隙あらばいたずらされ、全身の何もかもを暴かれて、好きにされてしまう。その事実が、たまらなく嬉しいのだ。

「※6回※ 少し早めに、興奮を抑えきれない呼吸をする。

主人公の裸は、七緒にとって何よりも価値があり、性的に興奮するものなので」

はあ、はあ、はあ。

はーっ♡ はーっ♡ はー……♡

「なんとか平静を装って。

少しでも気を抜けば主人公を楽しませるのを忘れて、好きなように触ったり、むさぼったりしてしまいそうになる自分を抑える」

はは。もうおっぱい出しちゃいましたね」

〈主人公〉

「あ………！」

七緒、話しながら、嬉しそうに主人公の乳首を優しく撫でる。

● 正面 15センチ

「きゃっきゃと嬉しそうに。

すでに勃起している主人公の乳首を凝視したのち、親指の腹で優しく撫でながら話す。
また、その勃起ぶりをからかう」

わ。すご♥

すごい勃（た）ってる♥」

〈主人公〉

「あ♥ あ♥」

そして、主人公の乳首を優しくつつく。

● 正面 15センチ

「きゃっきゃと嬉しそうに。

主人公の乳首を、人差し指の先で乳首を優しくつつんしながら」

ほら見て？ 可愛い。

先輩の乳首。

こうやってちよつとつんつんしてあげただけなのに、すごい喜んでいます♥
毎日気持ちいい事されて、乳首イキ覚えるくらい敏感になると。

女の子の乳首ってこんなすぐ勃（た）つようになっちゃうんですね♥」

〈主人公〉

「ばかあっ……♡ そんなのっ♡
なーが毎日触るからだろっ……♡」

涙ながらに反論すれば、いよいよ七緒の思うつぼだ。

七緒は『その言葉を待っていた』と言わんばかりの表情を浮かべると、しれっと指摘を認めてくる。

●正面 15センチ

「【にやにやと嬉しそうに。

自分達の性事情について、事実をたっぷりと述べてあげる事で、主人公を興奮させようとしている」

そうですよ？

私が先輩の事大好きで。

顔見てるだけでえっちしたくなっちゃうから。

我慢できなくて、毎日先輩の乳首いたずらしてたから。

先輩はこうなっちゃったんです」

〈主人公〉

「……………」

主人公の頭に、これまで幾度となく繰り返されてきた『いたずら』の記憶がよみがえる。いろんな場所で。キスされながら、抱きつかれながら、耳を舐められながら。

すぐく恥ずかしい格好をさせられながら。一番弱くて気持ちいい場所をいじめられながら。熱っぽく真剣に『好きです』とささやかれながら。

本当にほとんど毎日、もっと感じる身体になるように調教されてきた事がよみがえる。こうなってしまうたら、もう逃げる気も起きない。

主人公と七緒は本当にカエルとヘビの関係になって。主人公は、ただ食べられる瞬間を待つのみとなる。

七緒、主人公の右側に頭を移動させて、ささやく。
声の方向が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと、甘くささやく】

じゃあ今日も、先輩のよわよわお乳とおまんこ、強くするおしおき頑張ろっか♥」※

七緒、主人公の正面に頭を移動させる。
声の方向が『右』から『正面』になる。

●正面 0センチ

「優しく唇に軽くキスする」

ちゅ♡」

七緒、少し離れ、正面の位置でささやく。

それから、下から持ち上げるように自らの両胸を持つと、わざとらしく目の前でゆさゆさと揺らしてみせて、主人公の劣情を煽ってくる。

★正面 ささやく 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、甘くささやく。」

自分の胸を両手で持ち上げ、揺らして、主人公に見せつけながら」
ほら。先輩の大好きなーのおっぱいだよ？

先っぽと先っぽくつつけて。一杯気持ちいいのしようね♡」※

〈主人公〉

「あ………！」

七緒、持ち上げた胸を、主人公の胸のすぐそばまで近づける。

それから、焦らずにゆっくりと、その先端を主人公の乳首に擦り付け始める。

●正面 15センチ

「小さく喘ぐ。

主人公の乳首と、自分のそれが触れ合ったので、とても気持ちいい」

……あ。

「【※6回※ 少し早く、荒く呼吸する。

ゆっくりと『乳首合わせ』を始める。

刺激を求めていた自分の乳首が主人公の乳首と擦れた事で、とても気持ちいい」

はー。はあ。はあ

はー♡ はー♡ はあ………♡」

〈主人公〉

「………！ あ♡ ……あ♡ あっ♡ ああ………っ♡」

●正面 15センチ

「高く、ゆっくりと喘ぐ。」

そうする事で、快感に耐え、大きい声が出ないようにしている。

乳首合わせはまだ始まったばかりだが、すでにほとんど余裕がない」

あ………♡ あっ。

【高く喘ぐ。ものすごく気持ちいい】

ああ………♡

【※6回※ ゆっくり呼吸する。

何とか快感に耐えて、話そうとしている。

しかし『これは自分の理性が長くもたないかも』とすでに自覚し始めている】

はー、はー、はあ。

はー、はあ。ふう♡

【余裕があるふりをする。

とろとろの顔で喘いでいる主人公がとても可愛らしいので。

自分だって『ちよっと擦れただけなのに、もう、すごく気持ちいい』くせに、自分の事は棚に上げて言葉攻めする】

ふふ。声かわいいー♡

ちよっと擦（こす）れただけなのに、もう気持ちいいんですか？

「あまあまに。」

主人公に『勃起したおかげで。つぶつぶした感触になっている自分の乳首が気持ちいいのか』とたずねている」

なーの乳首、つぶつぶしてて気持ちいい?」

〈主人公〉

「あっ♥ あ♥ あっ♥
はーっ。はーっ。はーっ。ああ……っ♥
」

●正面 15センチ

「うつとりと。はあはあと興奮して。

七緒は、主人公の喘ぎ声が好きなので。

『主人公の喘ぎ声は、聴いていて、脳が痺れるほど気持ちいい』という意味で言っている」

ああ。その声、めっちゃ脳にきます。可愛い♥

【※6回※ 少し早く、興奮気味に呼吸する。

主人公と『乳首合わせ』をしながら、自分も気持ちよくなっているのです。
刺激を求めている乳首が主人公の乳首と擦れて、とても気持ちいい」

はー、はー、はー。

ふー。ふー。ふー……♡」

〈主人公〉

「あ……♡ あ♡ あっ……♡ あ♡」

主人公、無意識のうちに身を乗り出すと、小刻みに身体を揺らして、自分の乳首を七緒のそれに擦り付ける。

目の前が潤んで、かすむほど気持ちいい。

その上七緒も同じように感じまくっているようで、はあ、はあと甘い息を漏らしながら一緒に揺れてくれるから、夢のようだ。

乳首合わせなんてアダルト作品だけで見かけるもので、それも、見栄えがいいからしているだけなのだと思っていた。

でも、初めてこれをした日、主人公はそれが間違った認識だと知った。

お互いの顔を見ながら、敏感すぎる所を優しく刺激し合う。

その度に胸が不規則に上下して、その動きに、声が漏れるほどの快感が訪れる。

視覚的にも、愛撫としても幸せすぎて。主人公はこれだけで達してしまいそうになるし……。

口では意地悪を言いつつも、実際はまるで余裕のない七緒を見ると、その快感をこらえるさまがあまりにも可愛らしく、とても優しい気持ちになってしまうのだ。

● 正面 15センチ

「はあはあ息を乱しつつも、嬉しそうに。

余裕があるふりをする。

主人公が自ら身を乗り出して、乳首を擦り付けてきているので嬉しい。

なのでその状況を、言葉で聞かせてあげる」

ふふ。すごいくっつけてくる。

これ大好きですもんね？

乳首で乳首潰されながら、ぐりぐり押されるの。

【にやにやと、嬉しそうにからかう】

おっぱいで犯されてるみたいで嬉しいの？

おっぱい負けちゃうの嬉しいの？

変態♥」

七緒、正面の、今の位置でささやく。

★正面 ささやき 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「【必死に平静を装いながら、あまあまに、ひそひそとささやく。まるで、今思い出したかのように。】

内緒話風に言って、余裕があるふりをする。

気持ちよすぎるので、言葉攻めに集中する事で自分の気をそらし、快感に耐えようとしている」

あ。

後（あと）。ここ玄関なんで……♡

あんまおつきい声出しちゃダメですよ♡※

〈主人公〉

「あ……！ あ。あ。あ……♡」

だが七緒は、今日もあくまで『余裕だ』と言い張るようだ。

次なるやり口で主人公の羞恥心を煽ると、なんとか主導権を握り続けるため、ひそひそとささやいてくる。

★正面 ささやき 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「【必死に平静を装いながら、あまあまに、ひそひそとささやく。

自分達の今いる場所を再確認させた途端、主人公が露骨に声を押さえ始めたのが、可愛くてたまらない。

なのでまた内緒話風に言って、主人公をさらに煽る。

また、気持ちよすぎるので、言葉攻めに集中する事で自分の気をそらし、快感に耐えようとしている」

そうですよ？

先輩は今、壁の薄いうちの玄関で。

まだちっちゃい子が外で遊んでる夕方に。

自分からこんな格好になって、私に犯されてるんです。

いけない子ですね♡」※

〈主人公〉

「……………っ♡」

●正面 15センチ

「くすくすと嬉しそうに。

しかし、大分息が上がってきており、あまり余裕はない。

主人公の恥ずかしがる顔を指摘してあげる事で、ますます興奮させようとしている」わ。

その顔♥　もしかして想像したんですか？

『自分がやられてるとこ、誰かに聞かれちゃうかも』って思って興奮したの？
やらしく♥

【余裕のあるふりをして、優しく穏やかに。

内心『よかった。なんとか守り切った。ここまで来れば、もう欲望に負けず『おしおき』を遂行できる』と安心している】

ふふ。そんな感じだと、もうぱんつ濡れすぎて気持ち悪いでしょ。

ほら。エロ妄想してぐちゅぐちゅになったおまんこ、楽にしてあげますから。
ぱんつ脱いで。足開いて。

気持ちいいとこ、私に見せて？」

〈主人公〉

「うう………♥」

だから、主人公はもう素直にのった。

こんな自分に、こんなにも欲情してくれる唯一の女の子に。

今日も全部見せて、当たり前のように犯されて。

あんあん喘いで痴態を晒し、完全に負けてしまう事にした。

〈主人公〉

「……はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ、はあ……っ ♡」

SE 6 主人公が下着を脱ぎ、足を開く音

【最初から最後まで流す】

主人公、玄関の床に座ったまま下着に手をかけると、膝立ちになってショーツをおろし、それから、裸のお尻を床につけて完全に脱ぐ。

その過程で靴下が片方だけ引っかかり、脱げかけてしまったが……七緒はそれがとても気に入ったらしい。

欲望に満ちた目でじろじろと見下ろしながら、意地悪を言ってくる。

● 正面 15センチ

「【喜びをこらえきれない。

主人公があまりにも従順なので。

しかし、かなり息が上がってきており、あまり余裕はない」

あは♡ 即脱いでる♡

「ちよつとわざとらしく。

主人公の股間をよく見たいのに、スカートの影がかかるせいでよく見えないので。

それなら『スカートを脱いで』と言えばいい所だが、半脱ぎ状態で犯したいので、スカートは脱がせないでいる」

あーでも。暗くて良（よ）く見えないなあ……。。

「ちよつとわざとらしく。

まるで今思いついたかのように言っているが、最初からこうするつもりだったので」

あ♡ スマホのライトがありますね♪」

SE7 七緒が、スマホを取り出す音

「最初から最後まで流す」

七緒がスマホを操作して、白い光を主人公にあてている。

主人公が描いた絵をロック画面に設定して、主人公が赤ちゃんの頃の写真を壁紙に設定した、主人公との出会いのきっかけとなったスマホを、セックスの道具として使おうとし

ている。

『全く、なんて事をするのだろうか』と思うが……『それだけ愛されているのだ』という気がして受け入れる主人公もどうかしている。

それは、七緒がこんなに手を尽くして、丁寧に自分を喜ばせようとしている事がわかるからだ。

だから主人公は、恥ずかしい所まで、おとなしく見せてしまうのだ。

●正面 15センチ

「はあはあと興奮気味に、嬉しそうに。

もはや荒い呼吸を隠そうともしない。

制服が乱れに乱れた主人公の姿が、あまりにも扇情的なので」
ふふ。

このスマホ拾ってもらった時は、こんな使い方すると思ってませんでした♪

【『犯され待ちおまんこ』というので一つの単語。

『七緒の指を挿入してもらい、気持ちよくしてもらえるのを待っている主人公の性器』
という意味で言っている」

じゃあ。先輩の犯され待ちおまんこ見たいんで。

【『閉じ気味になっている主人公の性器を、主人公自身の指で開いて見せろ』という意味で

【言っている】

人差し指と中指で、開いて。

見せて？」

主人公

「 へ 」

素直に従うと、言葉にできないような快感と開放感が訪れる。

これをさせられるのは初めてではない。

何なら、頻繁にさせられているような気もするが……いつも、初めてこうするようない

倒錯した幸福感がある。

こんな恥ずかしい所を、七緒に見られてしまっている。

しかもそれを、七緒がこんなにも喜んでゐる。

それが嬉しくて、もう、他の事はどうでもいい。

そんな思いで満たされてしまうのだ。

つまり主人公には、露出願望があるのかもしれない。

一瞬そう思うが……もつと事態は単純で、これをするとなぜか気分になるから、主人公はしているだけなのかもしれない。

●正面 15センチ

「はあはあと興奮気味に、嬉しそうに煽る。

主人公の性器を直に、明るい環境で見られる事が、また、それがとろとろに潤んでいるのが、嬉しくてたまらないので」

あはっ♥ 先輩のおまんこ、触ってないのにひくひくしてる〜♥
「嬉しそうに。

主人公の性器を指さしながら話す。

『主人公からは、主人公自身の性器はまず見えない』とわかった上で煽っている」
ほらここ。『今すぐ挿（い）れて♥』ってお願いしてますよ？

「少しわざとらしく、不思議そうに。

『自分は、主人公が簡単に絶頂しない身体になるように、毎日セックスして鍛えてあげている』『だが、まるで効果がないようだ。不思議である』という意味で言っている」

私。先輩がつつよおまんこになれるように、毎日イかせて訓練してあげてるはずなんですけど。

全然強くなりませんね。

おかしいなあ♥」

〈主人公〉

「……………」
♥

七緒、正面の、そのままの位置でささやく。

★正面 ささやき 15センチ ※マークのセリフまでささやく

「くすくすと嬉しそうに。今日のセックスにおいて、王手をかけた気分。
また『私の指』と強調する事で、無意識のうちに、自分以外の他者にマウントを取っている。」

七緒は常に『主人公が欲しがるのも、主人公を気持ちよくできるのも自分だけだ』と暗に主張したので

ね。挿（い）れてほしい？

ちよつと前まで処女だったのに。今じゃすっかり気持ちいの覚えちゃったおまんこに。
私の指。挿れてほしい？」※

〈主人公〉

「……………」
♥

●正面 15センチ

「はあはあと興奮気味に、嬉しそうに煽る。

主人公があまりに素直に頷いたので」

わあ。素直♡

【上機嫌で】

いいよ♡

ふふふふ♡」

指で性器を開かされたまま上目遣いで頷くと、七緒の目が爛々と輝いた。
おそらく七緒も、早く挿れたくてしょうがなかったのだろう。

いつものようにいやらしい言葉を沢山復唱させたり、主人公が泣いて懇願するまで焦らしたりもせず、あっさりと手を伸ばしてくる。

SE8 七緒が、少し近づく音

【最初から最後まで流す】

七緒、少し近づく。

●正面 3センチ

「※3回※ ゆっくり呼吸する。

必死に興奮を抑えている。主人公に乱暴したくないので」
はー、はー、ふーっ……」

〈主人公〉

「……んうっ……♡」

SE9 七緒が、主人公の性器に自分の指を挿入する音

「【最初から最後まで流す】

そして、主人公の性器に自分の指を挿入する。

●正面 3センチ

「【少し驚いて、でも嬉しそうに。

主人公の性器に自分の指を挿入して、その温かさに、興奮で思わず声が漏れる】

あ……♡

「うっとり。思わず素のリアクションをしてしまう」

はあ……あったか……♡

「にやにやと嬉しそうに。」

すぐに『おしおき』中である事を思い出し、意地悪に徹そうとする。

なので、主人公の性器の感触を、早速実況して教えてあげる」

ほら。ぜーんぶ入りましたよ♡

先輩のナカ、すごいぐにぐにゆってます。

こんな場所でハメられちゃってるのに、嬉しそうにくぼくぼ動いてる。
そんなに欲しかったんですねえ」

〈主人公〉

「……あ♡ あ♡ あ……♡」

●正面 3センチ

「【とても優しく。意地悪な要素のない声で。」

七緒は、主人公が本当に恥ずかしそうだったり、ためらいがちだったりする時は、全く意地悪せず、欲求を肯定してあげるようにしている。

そのため、とても優しくなる」

いいよ？ 一杯気持ちよくなって♡」

SE10 七緒が、主人公の性器に自分の指を出し入れする音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【セリフと重ねて流す】

【▲1 で速度が一段階早くなる】

【▲2 まで流し続ける】

● 正面 3センチ

「【とても優しく。意地悪な要素のない声で】

ほーら……♡

【『ぐぼぐぼと、何度も指を出し入れするので、そうする事で気持ちよくなる』という意味で言っている】

ぐっぽ♡　ぐっぽ　ぐっぽ♡　ってしょ♡

【※3回※ ゆっくり呼吸する。

主人公の性器の中があたたく、また締め付けてきて、それだけでとても興奮するので。

また、己の欲望が暴走して、主人公に乱暴する事がないように、興奮を抑えようとしている】

はあ……♡ はあ……♡ はあ……っ♡
「

〈主人公〉

「……な♡ なーっ……♡
」

● 正面 3センチ

「『とても優しく。意地悪な要素のない声で。

余裕なさそうに名前を呼ばただけで、主人公が自分に助けを求めている事がわかった
ので」

んー？

おっかしい声出そう？ いいよ？ キスしよ♡
」

七緒、キスするために近づく。

● 正面 0センチ

「『息づかいのみで表現する。

キスの予備動作。ねっとなと口を開く』

はんむ……

【※4回※ キスする。

主人公の口を開けさせ、舌を入れてディープキスする。

ゆっくり、でもねちねちと、容赦なく口の中をいじめていくキス】

んっふ♡ん♡ふ♡んー……♡

【舌っ足らずに『頑張れ?』と言う】

がんばへ?

【※6回※ キスする。

主人公の声が漏れないように、引き続いたっぷりディープキスする】

んー♡ん♡ん♡んー♡んっ♡ん♡

【※1回※ 軽く唇にキスする。

これで一度キスをやめる】

ちゅ♡

【嬉しそうにため息をついて。

にやにやと言葉攻めする】

はあ。すごい可愛い……♡

おまんこ擦ってもらってとろとろになって。

気持ち良くなる事しか考えてないその顔♡

ほんっと可愛い♡

【※1回※ 軽く唇にキスする】
ちゅ♡
」

〈主人公〉

「…………あ♡ あ。あーっ…………♡
」

●正面 0センチ

「【とても優しく。意地悪な要素のない声で。

主人公の特に感じる所を、出し惜しみせずに丁寧に責めてあげる】

うん♡ わかるよ♡

こうだよね♡ これ大好きだもんね♡

はい、深呼吸して♡

一番気持ちいいの長く続くように♡

ゆっくり息しながらゆっくり擦ろうね♡

【※6回※ とても荒い呼吸で、でもゆっくり呼吸する。
興奮を必死に抑えている】

はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡

はーっ…………♡ はーっ…………♡ はーっ…………♡
」

〈主人公〉

「なーっ……♡ わたし、もうっ……♡」

限界を訴えると、七緒がますます嬉しそうにする。

『長く耐えられるように頑張れ』と言いながら、本当はすぐ絶頂する主人公が見たくてしょうがないのだ。

まったく、主人公の恋人はつくづく歪んでいる。

己を肯定できない弱さを、主人公を支配し、喜ばせる事で埋めようとしている。だけど主人公は、そんな七緒が可愛い。

七緒の為なら、どんな事でも受け入れたいし、どんな事でもきつと嬉しくなってしまうだろうと、本気で思う。

● 正面 0センチ

「【ちよっとわざとらしく。にやにやと嬉しそうに】

えー？ もうイきそうなの？

【甘々にからかう。強い優越感を感じているので】

はやーい♡ おまんこ弱いなく♡

【とても優しく。意地悪な要素のない声で。

快感に弱くなる一方の主人公が、とても可愛らしいので」
でも、ずーっと弱くていいですよ。

【※1回※ 軽く唇にキスする】

ちゅ♡

▲1 ここでSE10の速度が一段階上がる。

●正面 0センチ

「【とても優しく。意地悪な要素のない声で。

主人公が安心して絶頂できるようにしたいので。

また、己のささやかな虐待心は、すでに満たされたので」

いいよ……いいよ……いいよ……イッて♡

今日もなーに犯されてイこ？

【※4回※ キスする。

主人公の声が漏れないように、引き続いたつぶりデープキスする】

んっふ……ちゅ♡ んっ♡ ん♡

【※4回※ 少し苦しそうにキスする。

どんどん苦しそうになる。

主人公がイきそうになり、キスしながら身体を押さえてあげるのが困難になってきたので」

※『そろそろ絶頂ポイント』と伝わるように、わかりやすくお願いします

んーっ ♡ ん ♡

んっふ ♡ んっ ♡

【※1回※ 苦しそうにキスする。

ここで主人公が絶頂したので」

※『ここが絶頂ポイント』と伝わるように、わかりやすくお願いします
んーっ…… ♡

【※1回※ 苦しそうにキスする。

唇を重ねたまま、苦しそうに呼吸する」

※『絶頂ポイントを迎えた後』と伝わるように、わかりやすくお願いします

……っ ♡

▲2 ここでSE10がフェードアウトする。

七緒、少し離れる。

● 正面 15センチ

「※6回※ 荒く、早く呼吸する。

だんだんゆっくりになる。

キスし続けて息がかなり苦しいので」

はーっ♡ はーっ♡ はーっ♡

はーっ…♡ はーっ…♡ はーっ…♡

こうして主人公は、今日も七緒に抱かれた。

誰よりも愛しい女の子の手で簡単にイって、素直にくたくたになって。

今は、ついさっきまで自分の中に挿入されていた指を、ぼんやりと見上げている。

● 正面 15センチ

「それでも余裕ぶる。

きやつきやと嬉しそうに。

先ほどまで主人公に挿入していた自分の指を見つめながら。

その指が、愛液でどろどろに濡れ、すっかりふやけている事が嬉しくてたまらない」

あは♡ すーご♡

指。ふやふやでどろどろ♥

【※しばらく※ 舐める。

主人公を見つめながら、自分の指を、見せつけるように舐める】

あんむ……♥　じゅるるっ♥　んっふ♥

【心底幸せな気分で。

七緒は主人公の愛液の味が大好きなので】

おいし♥

ぴちやぴちやと指を舐める音の背後で、子ども達の楽しそうな声が聞こえる。

背德的すぎて、倒錯的すぎて、くらくらする。

それでも主人公は、全身に広がる甘い快感の余韻に支配されて、まだ動けずにいた。

● 正面　15センチ

「【嬉しそうにため息をつく。

心底幸せな気分で。今日も主人公をイカせる事ができたので】

はあ……♥

【しれっと、嬉しそうに。

これは、正直な所本心である。

主人公との行為の記録を全部残して、好きな時に閲覧できたら、それはどんなに幸せだろうかと本気で思う。

だが、実際にそうする気はまったくない。

そのようなデータが残る事はあまりに危険すぎるし、主人公をほんのわずかな危険にも晒したくはないので」

ほんとには先輩が私にやられてるとこ、全部動画で残しときたい位なんですけど。

【当然のように言う。

それは危険すぎるし、そもそも、全くそうする気はないので】

それは勿論ダメなので……♡

スマホじゃなくて、私の目に焼き付けときます。

【にやにやと。本当に言いたい事はこちらなので】
だから」

そんな主人公に、七緒がささやく。

それはあまりにも魅力的な誘いで、主人公は一も二もなく、素直に頷いていた。

七緒、頭を移動させて、主人公の右耳にささやく。

声の位置が『正面』から『右』になる。

★右 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく
「ひそひそと、甘くささやく」

また明日も、しましうね……♡

ここでフェードアウトして終了。